

---

# VanishingPoint

ハルニカ・B.I

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

V a n i s h i n g P o i n t

### 【Nコード】

N 7 7 4 9 U

### 【作者名】

ハルニカ・B・I

### 【あらすじ】

平和を失くした世界で大切なものを失った青年、日永佑月。彼は大切なものを取り戻す為に。世界が平和を失わないようにする為に。まっすぐな想いを胸に、異世界で戦うことを決意する。混沌とした世界で繰り広げられる混沌としたお話。

## 第一話 スタートライン（前書き）

この小説は二人の作者による執筆です。二人で一話毎に執筆していきますので、予めご了承ください。

## 第一話 スタートライン

彼の手が操る鉛筆が描く黒の線。黒で生み出されたそれらは、春を感じさせる木々や空のとても穏やかで長閑などこかの風景。そして、一つの点に向かって延び行く鉄道の線路だ。

線路はやがて地平線の彼方、一つの点　消失点　で収束した。交わることのなかった二本の線は、消失点で交わる。それはまるで、何かの出会いのように思える。

例えば、一本の線を自分として、もう一本の線を誰かだとしよう。最初は離れているが、次第に近づいていき、最後には一つの点となる。この点が、人と人との運命の出会い。はたまた、何か大きな出来事が起こりうる瞬間なのだ。

この黒だけで描かれた風光明媚な絵を生み出した彼は、そんな風に思いながらタイトルを考えている最中だった。

「兄さんってホント、絵上手だよねえ」

と、彼の背後から、うんうんと頷きながらの感心した声が発せられた。

後ろから彼の絵を覗き込んでいた端正な容姿の少女は日永　七星。

「そう言ってくれると嬉しいよ」

妹である彼女に優しげな表情で返した彼は日永　佑月。

十九歳の佑月と四歳年下の妹、七星は周囲に知られるほど仲が良い兄妹だ。とは言っても、兄がべったりなだけで、妹はごく普通に常識人である。

それでも、七星はそんな兄を慕っており、それ相応の絆があるのが仲が良い兄妹と言われる由縁であろう。

「でさ、買い物行くんだけど……」

「俺も行くよ。七星一人じゃ心配だからさ」

佑月はすぐ椅子から立ち上がり、テーブルに置いてある絵と鉛筆をそのままにして、出かけるための支度を始めた。

「それってどういう意味？」

「もし七星が危険な目に遭ったらどうするんだ。俺が助けないと」

「……兄さんって過保護だね。前からわかってるけど」

七星が若干呆れ気味に溜め息を吐いた頃には、既に佑月の準備は終わっていた。

二人で家を出て、徒歩で近所のスーパーマーケットへと向かう。

時刻は四時を過ぎたところ。五月になって暖かくなってきた最近では、まだ日が落ちることはなく、今も太陽がやわらかな光を放っている。

「ねえ、兄さん。明日って大学行くの？」

「いいや、行かないよ。何か用事？」

「うーんと……まあ、用事」

佑月の返事を聞いた七星はどこか嬉しそうな表情をしていた。

こぼれた笑みを見、佑月は明日 五月十四日 何かあった

か記憶の中を漁る。しかし、七星の誕生日はこの前やったばかり。母親の誕生日はまだ先で、佑月の誕生日もまだだ。父親は既にいない。

佑月が考えたところ、明日は何もない普通の日であるはずなのだ。

「ね、絵描いて欲しいんだ」

「うん？ 何の絵？」

「夜空……星空の絵。いいかな？」

「いいよ。任せなさい」

どうやら明日、単純に絵を描いて欲しかったらしい。

七星の要望を佑月は簡単に、快く引き受けた。この事は小さい頃からのよくある七星のお願いなので、佑月にとって全く不思議なことではなかった。

「ありがとね」

この言葉も、七星の笑みも昔から変わっていない。

ちゃんと成長はしているが、結局それは七星であり。

佑月はそれが嬉しかった。

……

それからスーパーの手前の駐車場に到着するまで、佑月は明日描く予定の絵の構図を練っていた。

星空、と一言で言ってもどんな星空が良いのか。七星の希望にできるだけ沿いたかったので、ほんの少し前を歩く七星に問いかける。

「七星、星空ってどんな感じの？」

そう佑月が訊いた時、七星の歩みが止まった。

ほぼ同時に佑月も歩みを止め、目の前に立ちはだかるものを凝視する。

そして、二人とも驚愕した。

突如、空間が歪み、真っ黒な輪が出現し、その中から吐き出されるように出てきた。

すぐそこには、異様な雰囲気放つ、淡い紫色を帯びた銀の鎧が佇んでいた。

片手には鈍色の所々に黒の模様が刻まれた槍を携えている。

兜の奥に光るであろう眼光は、しっかりと佑月を見つめ、視線を逸らさない。

二人の前で、鎧が僅かに動いたその瞬間。

佑月の中で警鐘が鳴らされた。

この正体不明の鎧が危険であることを瞬時に理解した。

西洋のいかにもな鎧がガシャンと金属音を出して一歩進む。

少し遅れてから二人とも後ずさる。

「何のご用でしょう？」

佑月の質問に鎧は答えず、無言のまま。

ただ返ってくるのは、動くたびに鳴らされる金属音だけだった。

二人はだんだんと距離を取りつつあった。何故なら、鎧が片手で槍を構えているからだ。

槍の先端の鋭く光る刃は見ただけで本物の刃物だと、二人とも確信している。

そうして何十秒かが過ぎたところで突然、鎧は動きを止めた。

「あの……」

佑月はそこで声をかけた。だが、その声をかけた次の瞬間。

先までとは比べ物にならない程の素早さで槍を両手に構え、踏み込みながら槍を突き出した。

そしてその刃は確実に、佑月の胸へ向けられていた。

鮮血と共に悲鳴が上がったのは本当に僅か数秒のこと。

「え……？」

佑月はぼつりと眩き、衝撃を受けて倒れる。その衝撃は優しいものだった。

空中に真っ赤な血が飛び散った。その血は佑月のものではなかった。

甲高い声の悲鳴が響き渡る。その声は佑月の聞き慣れたものだが、普通ではなかった。

横から七星に飛びつかれ、佑月は倒れていた。

真っ先に視界に飛び込んできたのは、痛みで表情を歪める七星と背中中の傷口から流れ出る赤い血。

あの槍が引き裂いたのは佑月の体ではなく、七星の体だった。

「七星！ 七星っ！」

「う、あつ……うう……」

佑月の呼びかけに、七星は呻き声でしか返せない。裂かれた背中への傷は深く、肉はもちろん背骨の方まで抉られている。

流血は止まらず、急速に七星が衰弱していくのが見て取れた。

「お前は何なんだ！ 何が目的でこんな、こんな事を！」

強い、とても強い感情の込められた問いかけにも、鎧は答えない。その時、近くで爆音が発せられ、衝撃波に佑月はまた倒されそうになったが堪える。

どこで爆発が起きたかはすぐにわかった。行こうとしていたスパーだ。何が原因か佑月はもう考えもしない。

烈々と燃え盛る炎と人々の悲鳴で、まさに阿鼻叫喚としている。

佑月の、また七星の、おそらく日本の、世界の知る現実ではなかった。この状況は。

非現実過ぎるこの光景を見ても、佑月はただただ七星のことしか頭になかった。

七星を出来る限りの速度で背負い、近づいてくる鎧から全速力で遁走する。

後ろを振り返ることなく、全力で家に向かって走った。走り続けた。

(どうなってるんだ……)

走りながら佑月が周りを見ると、怪物か化け物か、はたまた悪魔なのか。

得体の知れない異形のモノ達が辺りにいた。鎧が現れた時のように、真っ黒なリングの中から生み出されているように見える。

そして全力で走る佑月の視界、正面に再びあのリングが現れる。中から出てきたのは六本足のクモのような怪物。上半身は人に近いが、圧倒される程に違いがあった。顔に口があるのは理解できるが、腹と両手が口になっているのだ。下半身はクモを想像できるが、ここもぶよぶよの肉で、足というよりは六本の腕だ。

肉だらけのぶよぶよした気色の悪い怪物を前にして、思わず吐き気を催す佑月だったが、走る脚は止まらない。

横に逸れて通り過ぎようとしたが、あの怪物は佑月の予想よりも速く動けた。

回り込み、両手の口を伸ばしてくる。

悪臭しかしい口が佑月に噛み付こうとしたその時、六本足の怪物にパトカーが突っ込んだ。その衝撃で怪物が突き飛ばされ、気味の悪い口が佑月にも七星にも触れることはなかった。

「早く、逃げろ！」

パトカーから出てきた顔も知らぬ警察官が叫ぶ。

息を切らしながらも、佑月は彼の言葉を聞き、再度走り出す。直後、後ろで男性の断末魔が耳に入って、止まりそうになったが足を進めた。

そんな中、七星の息遣いが弱々しくなるのを佑月は感じた。

「七星、もうすぐ家に着くから！」

七星からの応答はない。既に意識は途切れ途切れの状態　否、もうないかもしれない。

だが、そんなことは認めたくなかった。  
七星の死など望んでいないし、望まれてもいない。

佑月を突き動かすのは、七星を助けるという一心だった。

ようやく家に到着した頃には、半分ほど日が落ちかけていた。  
途中、怪物に出くわしたり、七星を背負ったままで速度がでなかつたせいで時間がかかってしまった。  
急いで鍵を開けて家に入り、リビングのソファに七星を寝かせてから声をかける。

「七星……七星……？」

七星の瞳は虚ろとしていた。瞳から、光が失われていた。

「なんで、なんで、なんで……」

動かない七星を目の前にし、佑月は床に崩れ落ちながらそう呟くしかなかった。

この五月十三日の金曜日。

世界はおかしくなってしまった。

「夢だよな……これ」

いつの間にか、佑月は見ることがやめてしまった。

二人がまだ小さい頃、父親がいなくなったあの日から、七星のことを任されたあの日から。

佑月は七星を守り続けて生きてきた。

時には助けられもした、かけがえのない大切な存在を失った今。

佑月の生きる希望も、失われたのだ。

「に、さ……」

「え？」

微かな音だった。

佑月にとってそれは奇跡だった。

「七星！？」

「にい……さ」

囁くよりも小さな掠れた声で。

七星の最期の力。

「だい、じ……う、ぶ……？」

「うん、大丈夫だよ。俺は、大丈夫……」

涙をぼろぼろとこぼす佑月の言葉を聞いた七星は最後に、一滴の涙を流した。

そして、七星は微動だにしなくなった。

数秒の沈黙の後、佑月は思いを口にする。

「助けよう……俺は、七星を助きたい……」

訪れは本当に突然だった。

『助けましよう』

透き通るような声と共に、佑月の近くに女性が現れた。  
髪も肌も身に纏う布も白い、無表情な女性。

『私は混沌の神力オス』

「……………え？」

『あなたに世界を救って欲しい』

唐突に言われて、佑月は啞然とする。

『時間はそう長くありませんので、心して聞いてください』

「え……………うん。はい」

『こちらの世界に現れた魔物の根源を断って欲しいのです』

「えーと……………？」

『あなたはこことは別の、もう一つの世界に行ってもらいます。その世界で魔物の根源を断ち、この世界も助けて欲しい』

佑月は一度、視線を七星に向けてから質問する。

「それで、七星が助かる？」

『ええ。あなたが過去の別世界で根源を断つことで、この現在も変わります。魔物がいなくなっているのですから、彼女は殺されません』

「つまり……」

佑月は突拍子もないことを言われて混乱しながらの頭で話を整理する。

今、佑月がいるこの世界をA世界だとする。魔物がいたのがB世界。

B世界から魔物がA世界にやってきたので、過去のB世界へ行き、魔物がA世界に来れないようにする。

そうすると、B世界から見た未来のA世界　つまりは今現在のA世界に魔物が来れないので七星は魔物に殺されない。いつも通りの平和が訪れる、ということだ。

七星を助けられる。

ならば、佑月に断る理由などない。

「やるよ！　七星を助けられるなら」

『ええ、お願いします。では先にこれを』

そう言っただとカオスと名乗る女性が差し出してきたのは、シルバーリングのネックレスだった。非現実的な存在から、急に現実的なものを手渡されて佑月は少しばかり目の前の女性を疑う。

『それを身に着けていれば魔力を持つあなたは力を行使することができます』

「何？　マリオク？　チカラ？」

『魔力はこの世界だと本当に僅かな者しか持たない力です。あなたは魔力を持っていた。だから、私はあなたにお願いしたのです』

「あー、うん。俺の他にもいるんだ？」

『いました。ですが、魔物に襲われ残ったのは、あなたともう一人だけです』

カオスがそこまで言い終えて、次の言葉を発しようとした時。

家の壁を窓ガラスやテレビごとぶち破り、あの肉塊の魔物が現れた。

『もう時間がありません。このリング、カズムへ飛び込んでください』

佑月の隣に創りだされた、中が真っ黒なカズムと呼ばれたリング。魔物が出てきたものと同じのようである。

『あなたの魔力ならば三年ほど前の世界へ行けるはずです。そこで魔物の根源を断ち、世界を救ってください』

「よくわかんないけど、ありがとう。俺、がんばるよ！」

言いながら先程貰ったネックレスを首にかけ、佑月はカズムへ勢いよく飛び込む。

刹那、佑月の視界から光が消える。次いで、音が失せ、落ちるという感覚すらもなくなった。

そして、どれほど経ったかわからないところで、小さな光が目に見える。

光へ佑月が向かっていくのか、光が佑月に向かってくるのか、理解できないまま佑月は光の中に放り出されるのだった。

## 第一話 スタートライン（後書き）

作者の一人、B・I・トアニカです  
がんばっていきますので、よろしくお願いします

## 第二話 ファーストコンタクト

強烈な白の閃光に堪らなくなり、視界を閉じた。暫くして、瞼を刺激する光が弱まった事を感じて、ゆっくりと閉じた目を開く。

視界に飛び込んでくるのは、限りない草木。辺り一面何処を見ても自然であった。頭上には青々とした空が広がっており、枝葉が陽光を遮って尚明るい。

穏やかな雰囲気漂うこの場所だが、佑月は神経を研ぎ澄まし、周囲を確認する。何があるかの確認ではない。何が出て来るかの確認である。

佑月をこの場に送ったカオスと名乗った女性の言葉通りなら、この世界には七星の命を奪ったような生物で溢れかえっている筈である。故に警戒は怠らない。自分の死が七星の死に繋がる以上、絶対に油断はできないのだ。

森という遮蔽物の多い場所では、すぐ傍から何が飛び出して来てもおかしくはない。気を張り詰め、何時でも事に対処できるように周囲の索敵に専念する。

時間にして十五分程だろうか。周囲に気を配っていた佑月は、あまりの変化のなさに一先ず肩の力を抜いた。

「ふう…取りあえず、ここは平気…かな」

落ち着いた所で、これからの事を思索する。何時までもここに居る訳にもいかない。かと言って、この森をどう抜ければ人里に辿り着くのかも分からない。

完全に手探りで進むしかない現状に、自然と緊張が身体を支配する。当然だ。今まで生きて、見て、触れてきたことがあるものの中に、明らかな敵意を持って自分に害を成そうとする化け物は含まれ

ていない。

生来大人しく、喧嘩という人間間での傷つけ合いすらまともにした事があると言えない佑月に取って、命のやり取りなど以ての外なのだ。

だが今となつては、一瞬で人の命を奪う化け物が闊歩する森をたつた一人で進まなければならぬのだ。このような状況、たとえ武術に精通した人間でも御免こうむりたいだろう。ぐつと拳を握り、覚悟を決める。

「七星を助けるには、あんな化け物と数えきれないくらい戦わないとダメなんだ。最初から怯んでたら…ダメだ」

膝に力を込めて、立ち上がる。そして、大きく深呼吸をしてから、一步を踏み出した。

……

どれ程歩いただろうか。幸運な事に、一度も化け物と出会うことはなかった。周囲は依然変わりなく、森の終点が見えることはない。ひたすら前進を貫いて一つの変化も見られないというのは、この森の広さ故か、はたまた運が悪かったのか。

軽く溜め息を吐こうとした時、視界の端に見慣れない色が映った。森にはそぐわしくない日の出を連想させるかのような鮮やかな金色。衝動的に、佑月はそれを追いかけていた。

初めて訪れた変化だった。だが、後で思い返してみれば、それはとても愚かな行為だったろう。確かな確証も無く追いかけた結果、それが自分に害を成すものであったらどうしたのか。

しかし、今の佑月にはそんな考えは微塵も存在していない。ある

のは、思わず目を奪われる程の金色の正体と、それを持つであろう者への好奇心だけであった。

それを追いかけて辿り着いたのは、円状の開けた空間。円周には等間隔で木々が立ち並び、足下の雑草は全体的に短く整っている。また休憩の為だろうか、ベンチ的役割の倒木を配置してある事から、人の手が入っている事が窺える。

そこに彼女はいた。

整った顔立ちに白磁のように白くきめ細かい透明感のある肌。

そして、白いリボンで一つに束ねられた艶やかな長い腰まであるうかという金色の髪。華美でない衣服は、容姿の良さをよりはつきりさせた。手に提げた籠には、この森で採取したのだろう薬草と思わしきものが窺える。

彼女は凝然として立ち尽くす佑月を見て、小首を傾げる。そして、佑月に向かって歩み寄って来る。

我に返った佑月は、ふと彼女の後方へ視線が行く。たまたま視界の端に映った何かにただ視線を向けただけ。だがそれを認めた瞬間、慄然として全身に寒気が走った。

四足の獣。彼の知識を以て表すならば、それは狼となる。

だが、あまりにも異質なそれを、狼とする自信は佑月にはない。通常の狼と比べ体躯は倍以上、異様に発達した鋭利な歯牙、そして全身を覆う漆黒の体毛。怪しく光る赤い瞳を揺らし、木々の合間からゆっくりと現れる。

目が離せない。身体が嘘のように硬直して動かない。あまりにも凶暴で獰猛だという雰囲気呑まれてしまった。

しかし、それと同時に蘇るのは、最愛の妹が貰かれたあの光景。自分を庇い、身を呈して守ってくれた彼女の勇気。そんな彼女を助けると誓った決意。

(何してるんだ…怖いじゃないよ…何の為に来たんだよ…)

このまま狼を野放しにすれば最も近く、尚且つ背を向けている目の前の少女は、間違いなくその歯牙によって無残な姿に変えられる

だろう。

七星のように。

ぐっと力強く、拳を握る。視線はしっかりと狼を捉える。そして前傾姿勢になり、足に力込める。

硬直は既にある。震えはある。だが

(走りだせる…！)

狼が飛びかかりの予備動作に入る。瞬間、佑月は弾かれたように駆け出した。

突然の行動に、少女は目をまるくする。同時に佑月は焦燥を露わにする。

飛び出しは悪くなかった。だが、速度が足りない。このままでは、僅かに間に合わない。

(ダメだっ！ そんな事はさせない！ もっと速く…速く！)

そう願った刹那、少女の視界から佑月が消えた。

急に足に力が籠った。まるで、自分の身体でないかのような力強さ。違和感を覚えつつも、少しでも速く前へ進む気持ちで、全力で地を蹴った結果、佑月は弾丸のように狼に突っ込んだ。

その行動は、完全に虚を突き、見事に飛びかかろうと空中に飛び出した狼を吹き飛ばした。

しかし、勢いは殺しきれず、無様に地面をごろごろと転がった。

起き上がった佑月は、訳が分からず自分の身体を見下ろした。変わりない自分の体に起きた変化に戸惑いを隠せない。

そうしている間に、こちらも起き上がった狼が佑月へと狙いを変更した。今度は予備動作なく駆けだし、唸り声を上げて佑月に飛びかかる。

突然の事に対処が遅れ、反射的に腕を顔面の前で交差させ、最低限の防御を取る。そして、その腕に歯牙が食い込む瞬間、眼前にあった狼が真横へ弾き飛んだ。

何事かと一瞬呆けてしまったが、すぐに意識を狼へと向ける。狼は低い唸り声を上げて、佑月の背後を威嚇する。

狼の視線を辿るようにして、そつと振り向くと少女が鋭い視線で狼を制していた。

じりつと一歩、踏み出そうとする狼へ向けて、少女は右手で宙を薙ぐ。すると、踏み出そうとしていた地点を、まるで刃のように鋭利な風が切り裂いた。

咄嗟に大きく下がった狼は、しばし少女と睨みあいを続け、やがて森の奥へと去って行った。

それを見届けて、大きく安堵のため息を吐くと、傍らに少女が微笑を湛えながらやってきた。

「あ…えーと…その、ありがとう」

何がどうなったかはさっぱり分からないが、自分が彼女に救われた事だけは確かだろうとして謝辞を述べた。

そして、述べて直ぐに目の前にいるのが、金髪にエメラルドのような瞳を持つ少女だということを出した。なけなしの英語力で、もう一度述べようと開口しかけた時、透き通るような声が鼓膜を刺激した。

「いいえ、ありがとうはこちらの台詞です」

思わず、目をまるくした。よもやこの異国人然とした少女と日本語で会話出来ようとは、思いもしなかった。

「あ、ああ…いや、うん…どういたしまして…」

「きちんとお礼をしたかったので、私と一緒に来てくれませんか？ここは…危ないので…」

礼の件はともかく、この世界で初めて出会った人間であるし、ここから離れたいとも思っていた佑月は即座に頷いた。

「良かった。じゃあそう遠くはないですから、着いて来て下さいね」  
柔らかく微笑んで、彼女は森の中を迷いなく進んで行く。足取りは軽くものの数十分程で、森林地帯を抜け遮蔽物の少ない平原に出た。

先程まで歩き続けていた佑月は、苦笑を浮かべる。

「どうかしましたか？」

「いや、さつきまで散々歩いたのに全然森の外に出られなくてさ。けど、君に着いて行ったらすぐに出られたもんだからね」

少女は少しだけ可笑しそうに笑い、抜けたばかりの森へ視線を向けた。

「そこまで深い森じゃないですけど、知らない人が簡単に抜けるのは難しいかも知れませんか。私は、よくここに切傷に効く薬草を探りに来るんで慣れてるんですけど」

その言葉になるほどと納得し、佑月は彼女が提げている籠を指差す。

「へえ、そうなんだ。じゃあ、それがその薬草？」

「はい。他にも軽い解熱作用のある物と炎症に効く物があります」  
そう言って籠の中身を佑月に見えるように差し出してくる。上から覗き込むようにして見てみると、色の濃い薬草が籠の中程の高さまで摘まれていた。

それに佑月は少々疑問を抱いた。よく採取に来ると少女は言っていたが、よく来るのならば一度にこんなに必要なのだろうか。

聞けば、効能は主に切傷だと言う。そんなに彼女の住まう場所は、切傷を負う者が多いのだろうか。

しかし、そんな疑問は彼女自らの言葉によって、見当違いなものだと理解させられる。

「最近はおルカの出現が頻繁になりつつあって…村の自警団の人達も頑張ってくれてはいますけど、どうしても怪我人が多くて…」

「……おルカつてさっきの？」

少女は佑月の問いに不思議そうに首を傾げたが、そのまま頷いた。「はい。さっきの獣もおルカですけど…あの…失礼ですけど、本当に知らないんですか？」

佑月は一瞬逡巡した。自分は違う世界から来ました、等と言つても信じて貰える気がしなかった。

だが、すぐに隠す必要もないと思い直した。ずっと隠しては過ごせないし、何より自分は知らない事が多すぎる。それを知るために

は、自分の素姓を明かすことが一番手っ取り早く思えたのだ。

そして、佑月は話した。自分がこの世界の人間ではない事、元いた世界にオルカが現れた事、妹を救う為にカオスと言う女性に送られて来た事、そしてその方法がこの世界を救う事であること。

ゆっくりとだが包み隠さず全てを話した。思えば、出会って間もない少女に自分は何を言っているんだろうという気にならないではないが、事実であるので仕方がない。

たとえそれがどんなに現実離れた物語のような内容だとしても、嘘は付けない。それでは信頼を得ることは決して出来ないのだ。

だが、佑月とてまさか信じて貰えるとは思っていない。どんな反応が返ってくるか、恐る恐る少女の顔色を窺ってみると、意外にも彼女は何やら考え込んでしまっている。

「カオスって…まさかそんな…でも…」

佑月は彼女の整理が終わるまで静かに待った。そして、考えを終えた少女は力強く顔を上げ、佑月の目を逸らすことなく見つめた。少女が自分を見定めているのだと感じ取り、佑月もまた彼女の視線に心えるように見つめ返す。

数秒の後、彼女はふわりと微笑んで、佑月の両手を包み込むように握った。

「信じます。正直なところは判断し切れない…ですけど、貴方なら…私は信じます」

ああ…良かった。内心で安堵の息をほっと吐き、彼女の手の温もりを感じる。そして、瞳を閉じて胸に沸き上がった感情に従い一言告げる。

「ありがとう」

## 第二話 ファーストコンタクト（後書き）

もう一人の作者、ハルです

稚拙な文章ではありますが、少しでも伝えられるよう努めていきますので、よろしくお願いいたします

### 第三話 ジェントルビレッジ

金髪の流麗な乙女と呼ぶに相応しい風姿の彼女と共に獣のオルカ  
佑月の知識で言うならば、見たことのない狼 をなんとか撃  
退した佑月は、森を抜けて平原を歩いていった。吹き抜ける暖かな風  
が優しく頬を撫で、隣の彼女の金髪をなびかせる。

膝にも届かない草花達が辺り一面に広がっている平原。森という  
視界の悪い場所から一変して、視界の開けた場所に出たおかげか佑  
月は僅かに安らぎを得る。未だにあのオルカという生物に襲われた  
恐怖が拭い切れないが、隣の美少女と自然との癒しが佑月の心の支  
えとなっていた。

少し付け加えると佑月の心が楽になったのは然程離れていない所  
に、村が見えたからというのもあった。

「あれが私の住んでるエーナ村です。いい所なんですよ」

と、村を眺めていた佑月に彼女は微笑を浮かべて言った。表情か  
らその言葉が本心のままであることが簡単に見て取れる。

確かに、先のようなオルカが近くに出没する割と危険な村だとは  
到底思えない。近づくにつれて人の姿も見え、とても平和でおだや  
かな村にしか見えない。実際、そうなのだろう。

「オルカがいなければ、もっといいんですけどね」

そう言う彼女の表情は微苦笑になっていた。表に出し切っては  
ないが、どこか痛そうで辛そうで悲しそうで。けれど、とても強く  
て。精一杯笑っていた。

心配する佑月はどう声をかけようかと迷っていたが、彼女はすぐ

に表情を切り替える。

「さ、行きましょう。えっと……」

そこまで言うてから彼女は戸惑いを見せる。

「うん？ ああ、ごめんごめん。俺は佑月。日永 佑月」

「ユヅキさん。私はエルミナ・クオルシスって言います。エルって呼んでください」

エルミナと名乗った七星と同じくらいか若干大人びた感じの少女は、ぺこりとお辞儀をして微かに幼げなあどけない笑顔を見せた。それはまるで華麗な妖精。絵に描いたような美少女の笑みだった。

そんな彼女を見、佑月は胸が高鳴るような感覚を覚えてしまった。一瞬か数秒か、佑月がぼっとしているのを不思議に思ったエルミナが頭の上にクエスチョンマークを出して首を傾げる。

「ユヅキさん？」

見とれていた佑月は不意打ちを喰らったかのように慌てながら適当な言葉を返す。

「……あ！ うん！ 何!？」

「えっ!？ いえ、あの、行きましょ？」

驚きつつ驚かれつつ。

佑月とエルミナは平原の中心ではないが、平原でそんなやり取りを繰り返してから村に向かって再び歩き始めた。

「ユヅキさん、質問いいですか？」

暫くという間も無く、落ち着きと平静を取り戻した佑月はエルミナに声をかけられる。

「はい、どうぞ」

「気になってたんですけど、その服装ってユヅキさんの国では一般的なんでしょうか？」

と、そんな思ってもなかった疑問を投げかけられた。

言われてエルミナの服装を見てみると、膝丈まである少し厚めの白いワンピース。その上に麻のマントを羽織っている。腰にはベルトポーチがあり、短剣が特に外装もない鞘に納められた状態でベルトに掛けられている。そして茶色の皮でできたロングブーツという服装だ。後は提げている薬草入りの籠。

対して佑月はと言うと、白のTシャツに黒のジャケット。下はジーンズ。

二人の違いは明確であり歴然かつ一目瞭然。異国、異文化、異世界同士の服装なのだ。二人が並んでいるこの光景の違和感は凄まじく強烈なものである。とは言え、佑月からしてみれば、ファンタジーな世界の住人達の服で片付けられる。

しかし、エルミナ達　この世界の住人達からすればさぞ謎めいて摩訶不思議な格好に見えることだろう。佑月の着ている服は、この世界において全く一般的ではない。むしろ珍奇な格好だ。

否応なく目立ってしまう。

そんな服装なのだから、エルミナが疑問を持ってしまつのも当然と言える。

とりあえずはエルミナの疑問に答える。

「俺の国じゃ一般的だと思うけど……ここじゃ変かな」

服もあるが、髪に関してもその可能性が出てきたことに佑月は気付く。エルミナのような金髪が普通なのであれば、また佑月がおかしい、普通じゃない人になってしまう。

この世界で目立つことのメリット、デメリットがまだ整理できていないので、できれば騒がれたくない。

佑月はこの世界で何をどうするべきか、よりも今日これからどうするかの方を考えていた。

「えーと、エルでいいんだっけ？」

「あ、はい。何でしょう？」

「エルの村には宿とかあるかな？」

と訊いた佑月だがとても円が使えるとは思っていない。日本語が通じるこの世界だが、服は日本のとは大分違う。通貨も同じではない可能性は高い。しかし、ポケットに入っている財布の中身がこの世界でそれなりの価値があるものだとすればなんとかして宿泊できるだろうという淡く儂い夢の如き希望を胸に抱いていた。

「ありますけど……ユヅキさん、お金ないですよね？ アスって単位わかります？」

「ありません。わかりません」

だが諦めない。

佑月は上着のポケットから財布を取り出し、百円玉をエルミナに見せて反応を待つ。

「……これ、ユヅキさんの国のお金ですよ？ 使えないと思いませんよ」

「そっか、そうですよねー」

いともたやすく行われるえげつない希望のぶち壊し。

価値のあるなしが不明な円が使えないと言われ、期待はしていなかったものの小さなショックを受けた佑月。そんな彼にエルミナは言う。

「宿なら心配しなくて結構ですよ？」

「え？ お金を恵んでくださるのですか？」

救いの手が差し伸べられた。佑月の中でエルミナは華麗な妖精ではなく慈愛に満ちた天使へランクアップする。

「やたらと宿に拘ってるみたいですけど……私家で良ければ泊まっても」

「そうしますそうさせてくださいお願いします。野宿は嫌なんです」

エルミナの言葉にはまだ続きがあったようだが、それをぶった切つて佑月は頭を下げつつ宿泊の申請をする。バケモノ オルカに襲われてから、外にいるだけで神経が擦り減ってしまうようになっていた。おかげ様で今の佑月の疲労は人生の中で一番ではないかと

いつくらの疲労だ。

とにかくゆつくりと休養が取れる場所が欲しかった。

あまりの懇願っぷりに驚いてエルミナは困ったように笑うが、宿泊の件に関しては勿論快く了承してくれた。次いで尋ねる。

「野宿に嫌な思い出でもあるんですか？」

「ないよ。ないけど、嫌だ」

そんな神経の擦り減らないやり取りをしながら歩き、遂に村に足を踏み入れた。

洋風チックな木造家屋が並ぶ、中規模の広場村。今も昔にも日本では見れないような光景だった。所々に大きく背の高い木があり、村の中心の広場には井戸や背もたれの無い木製ベンチがあり、人が集まっている。

できることならあまり目立つことはしたくなかったが、エルが何も言わずに広場の人だかりに歩いて行ってしまい、ついて行った佑月は村人からの視線の集中砲火に耐えることとなった。

「おかえり、エルちゃん。怪我はないかい？」

「大丈夫です。薬草も採れました」

そう言い、エルは薬草の入った籠をおばさんの一人に手渡した。おばさんは薬草に目を通し終えてから口を開く。

「ありがとうね。ところで、この人はどこの国の人だい？」

「見ない人だけど……」

「どこで捕まえてきたのさ？」

「まさかエルちゃんの彼氏かな？」

「あら、まあ、いいわねえ。こういう人がエルちゃんは好みかあ」

「よく見たらいい男だわー。よく見なくてもいい男だわー」

「式はいつ頃挙げるのさ？ 盛大にやんなくちゃねえ」

「お兄さん、エルちゃんはホントにイイ子だから」

「お幸せにね」

人柄が良さそうなおばさん達だが、視線の集中砲火に続き言葉のマシンガンまで撃ち込んで来る。オルカ程ではないが、このおばさん達も恐ろしい。そんなおばさん達に説明をするべくエルが発言する。

「あの！ 式とか、そういう関係もないし、私の評価はありがとうございますけど、この人はユヅキさんで、彼氏とかじゃなくて、えーと……ね？」

やんわりと丁寧にしかし平静さを失いながら否定していくが、おばさん達の耳にエルの声は届かず、固まって密集陣形を組んで話し込んでしまった。何はともあれ、佑月とエルは勝手に解放されていた。束縛されていたわけでもないのだが。

とりあえず、佑月は未だに帰ってこないエルの肩を軽く叩いて言

った。

「家に案内してくれないかな……？」

「あつ、ごめんなさい！ こっちはです」

ついさっきまで顔を赤らめてオロオロしていたエルはすぐに自分を正すと、少し早歩きで広場から出て行く。既におばさん達の視線も興味も他の方に向かっていているようで、佑月とエルは易々と広場から逃げ延びることができた。

広場から出て一分も経たずに佑月の前を歩いていたエルの足が家の前で止まる。佑月の見た目では築何年かはつきりとはわからないものの、他の家よりどこか古い感じを醸し出していた。しかし、目立った違いはなく、普通の家だ。

「ここです、私の家」

扉についている鍵穴は、ファンタジーな世界ではよく見かけるお馴染みだろっあれであり、向こうの世界ではウォード錠と呼ばれる種類のものだった。

エルは赤銅色の鍵を使い、慣れた動作で扉を開けてから言う。

「どうぞ、ユツキさん」

「ありがとうございます。お邪魔します」

入ってすぐ靴を脱ごうとした佑月だったが、石畳の床があるだけで向こうの世界の玄関というものは存在せず、エルもブーツを脱ぐ素振りを見せなかったので、佑月は納得してから家の中を見回した。

まず居間には机や椅子、奥には暖炉があつた。チエストや棚も置かれていた。明かりは窓からの光と幾つかの蠟燭。台所という台所はなく、なんとか調理ができそうな場所に皿や鍋があるだけ。他には別室としてトイレだろう個室と寝室があり、小さいベッドが三つほどあるくらいだ。

そのベッドの一つに誰かが寝ていて、エルはその誰かを起こしに行った。

「おばあちゃん、お客さんをここに泊めるつもりなんですけど」

「エルちゃんがいいなら、いいんだよ」

「うん、ありがとう」

短いやり取りを聞き、寝ていたのがエルの祖母らしいことがわかる。優しいそうな人だなと思いつつながら佑月はエルが戻ってくるのを待つ。ふと気付くと、エルの親らしき人の姿が見えない。出かけているのだろうかと考えた辺りで、エルの声がかかった。

「ユヅキさん、ベッドはあそこにあるのを使ってくださいね」

「わかった。お世話になります」

佑月はひとまず、疲労した体を椅子に腰掛けて休ませる。座ってから今日あった出来事を振り返ってみるとかなりドタバタしていた。ドタバタを超越してとんでもない出来事ばかりの一日であった。

いつものように起きて、暇だったから絵を描き、七星と一緒に買い物に出かけた。ここまでは良かった。それから変な鎧　オルカに七星を殺され、逃げてから女神力オスに出会って、頼み事をされて異世界にやって来て、また獣のオルカに襲われ、エルを助けつつ、

エルに助けられた。次いで、村に案内され、エルの家で今こうして  
いる。

本当にいろいろな事があつた一日で、始まりの日。

終わりの見えないこれからの、始まりの日。

### 第三話 ジェントルレッジ(後書き)

トアニカです

なんだかゆっくりした回で…

ゆっくりした更新速度です

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7749u/>

---

VanishingPoint

2011年12月29日00時45分発行